



ナチスドイツ

文献ガイド

一次史料から最新研究、
サブカルチャー受容まで

森貴史

1世紀にわたる

ナチス研究史、 文化史の精髓

『わが闘争』の現代ならではの読み方、
漫画や音楽に登場する「ナチカル」、
ナチス・ミリタリー入門、2020年代の最新研究——

がここに!

ナチスの歴史、功罪、反省を考えるための必読書案内!

ナチスドイツ文献ガイド

一次史料から最新研究、
サブカルチャー受容まで

森貴史

星海社

356



SEIKAISHA
SHINSHO

序

本書は、現在の日本でそれこそ無数に存在するナチスドイツとヒトラーの関連書、とりわけ「正史・政治史だけでは見えてこない立体的な文化史・裏面史」をテーマとした日本語書籍を紹介しようとするものである。

これらの書籍をピックアップするための視点としては、以下の3点に立脚した。

- a 学術的な書籍だけを取りあつかうのではなく、論点や視点が興味深い書籍も対象とする
- b 政治学的な議論や正史のみに言及した書籍ではなく、いわゆる「奇書」もふくめて紹介する
- c それぞれの書籍の読みどころや、読者にとって有益だと思われる内容を紹介する

出版時期が20世紀だったり、現在では入手が少し困難だったりするものもあるが、古本屋サイトのほか、公立図書館などでも読むことができるはずである。

とはいえ、あらかじめ「ナチスとヒトラーに関する教科書的な書籍」の知識も獲得したいという読者諸賢には、以下の4冊をご紹介します。少しずつ内容が異なっているものの、新書ゆえに入手しやすく、取り組みやすい順番で列举させていただきます。

① 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社現代新書、2015年

② 大澤武男『ヒトラーとユダヤ人』講談社現代新書、1995年

③ バステイアン・ハイン（若林美佐知訳）『ナチ親衛隊（SS）「政治的エリート」たちの

歴史と犯罪』中公新書、2024年

④ リチャード・ベッセル（大山晶訳）『ナチスの戦争1918―1949 民族と人種の

戦い』中公新書、2015年

ナチス関連の歴史書には大量の人名や事項が登場するために、それらをご確認したいさいには、これらの事典のご参照をおすすめ申し上げます。

a ロベルト・S・ヴィストリヒ編（滝川義人訳）『ナチス時代ドイツ人名事典』東洋書
林、2002年

b ジェームズ・テラー、ウォーレン・シヨー（吉田八峯^{やっお}監訳）『ナチス第三帝国事典』
三交社、1993年

本新書で言及する人名、地名などのカタカナ表記は書籍ごとのばらつきがあるが、あえて統一せずに、基本的にはその節ごとにそれぞれの書籍の表記に従っている。その一方で、筆者が使用する表記は、原著者のものとは相異することもある。

同様に、「ナチ」、「ナチ党」などの用語は、日本語での表記が著者、訳者によってさまざまだが、本書ではすべて、「ナチス」、「ナチスドイツ」に統一した。

お手もとの本書が、書き手の視点やテーマ設定によって、さまざまに異なって論述されるナチスドイツとアドルフ・ヒトラーを広範に知ることができる魅惑のブックガイドとして、みなさまの読書生活に潤い^{うるお}をもたらすことを祈念して。

第1章 ナチスをめぐる重要人物たち
15

1 『関心領域』マーティン・エイミス（北田絵里子訳）

日常から壁1枚の隣にある強制収容所 16

2 『アンネの日記 増補新訂版』アンネ・フランク（深町眞理子訳）

隠れ家生活を送るアンネのミドルティーン女子らしい一面を知る 23

3 『新版 エルサレムのアイヒマン 悪の陳腐さについての報告』ハンナ・アーレント（大久保和郎^{かずお}訳）

現在まで続く「悪の凡庸さ」論争の発端となった古典 30

4 『わが闘争』（上・下）アドルフ・ヒトラー（平野一郎、将積茂しょうじくしげる訳）

『続・わが闘争 生存圏と領土問題』（平野一郎訳）

いまだ大きな影響力を持つ、言わずと知れたナチズムの原典 37

5 『帰ってきたヒトラー』（上・下）ティムール・ヴェルメシュ（森内薫訳）

ナチスターが薄れつつある時代の歴史改変ヒトラー小説 44

6 『20世紀の怪物 真実のアドルフ・ヒトラー』金森誠也かなもりしげなり

思想史家が一次史料を駆使して描いた人間ヒトラー像 51

7 『ヒトラーの科学者たち』ジョン・コーンウェル（松宮克昌訳）

ナチスの科学力は「世界」だったのか？ 58

8 『ナチス軍需相の証言 シュペーア回想録』 アルベルト・シュペーア（品田^{しなだ}豊治^{とよじ}訳）

ヒトラーの側近にしてナンバー2が語る政権の内幕 65

コラム 1 昭和マンガの巨匠たちが描いたヒトラー 72

第2章 ナチスをめぐる文化史 81

9 『制服の帝国 ナチスSSの組織と軍装』 山下英一郎

膨大な写真に見るナチスの組織構造と日常生活 82

10 『ユダヤ人カリカチュア 風刺画に描かれた「ユダヤ人」』 エードウアルト・フックス（羽田^{はだ}功^{いさお}訳）

ナチス以前のユダヤ人差別史が風刺からわかる 89

11 『倒錯の都市ベルリン ワイマール文化からナチズムの靈的熱狂へ』 長澤均、パピエ・コレ ながさわひとし

ワイマール共和国とナチスのつながりを文化史から読み解く 96

12 『ナチスと動物 ペット・スケープ・ゴート・ホロコースト』 ボリア・サックス（関口篤訳）

「森と動物」を切り口にナチスの自然保護や人種政策にまで迫る名著 103

13 『ナチ略奪美術品を救え 特殊部隊「モニュメンツ・メン」の戦争』 ロバート・M・エドゼル（高儀進たかぎすすむ訳）
60万点に及ぶナチス略奪美術品をめぐる攻防 110

14 『ユダヤ人財産はだれのものか ホロコーストからパレスチナ問題へ』 武井彩佳
ナチスによるユダヤ人財産収奪と戦後返還の歴史 117

15 『検証 ナチスは「良いこと」もしたのか?』 小野寺拓也、田野大輔
世にあふれる安易なナチス礼賛の真偽を最新研究で検証する 124

16

『ナチス・ドイツの有機農業 「自然との共生」が生んだ「民族の絶滅」〈新装版〉』
 なせナチズムは「自然との共生」のため有機農法に励んだのか
 藤原辰史 ふじはら たつし 131

17

『ヒトラーの呪縛 日本ナチカル研究序説』(上・下) 佐藤卓己 たくみ (編著)
 日本のポップカルチャーはなぜナチスを好むのか? 138

コラム 2 コンビニエンスストアのワンコイン本 145

第

3

章

ナチス思想の源泉

153

18

『定本 シオンの議定書』 し おうてんのぎだか 四王天延孝 (原訳)、
 ユダヤ陰謀論の「原典」は世紀の偽書か? てんどうじくまる 天童竺丸 (補訳・解説) 154

19

『ナチズムと祝祭 国家社会主義のイデオロギー的祭儀と政治的宗教』 K・フォンドゥング（池田昭^{あきら} 訳）
 「宗教」化するナチズムを祭儀から暴く 161

20

『エリーザベト・ニーチェ ニーチェをナチに売り渡した女』 ベン・マッキンタイアー（藤川芳朗 訳）
 ナチスのニーチェ思想受容と南米ドイツ人コミュニティの知られざる関係 168

21

『来るべき種族』 エドワード・ブルワー＝リットン（小澤正人^{おざ まさと} 訳）
 「地球空洞説」をナチスに広めたオカルト・ユートピア小説 175

22

『二十世紀の神話』 アルフレート・ローゼンベルク（丸川仁夫^{まるがわ ひとお} 訳）
 『わが闘争』に次ぐナチスのバイブルにして「アーリア人」の偽史をつくった理論書 182

23

『ワイマル共和国の予言者たち ヒトラーへの伏流』 ウルリヒ・リンゼ（奥田隆男、八田恭昌、望田幸男 訳）
 ドイツ動乱期に現れた「ヒトラーになれなかったヒトラー」たち 189

24

『ハイデガーの超一政治 ナチズムとの対決／存在・技術・国家への問い』轟孝夫
20世紀を代表する哲学者はいかにナチスに加担したか 196

コラム 3

邦訳がないナチス関連文献

203

第 4 章

オカルティズム

213

25

『ヒトラーとオカルト伝説』ケン・アンダーソン（澤田憲秀訳、井村宏次解説）
ヒトラーのオカルト伝説の虚実を学術的に検証した労作 214

26

『20世紀最後の真実 いまも戦いつづけるナチスの残党』落合信彦
ナチス残党伝説を広めた日本の代表的なナチス都市伝説本 221

27

『ナチスと隕石仏像 SSチベット探検隊とアーリア神話』 浜本隆志

チベットの隕石仏像にまで及ぶナチスのオカルト的想像力

228

28

『世界の傑作機別冊 ヒトラーの秘密 ヒトラーは本当にUFOを作ったのか?』 坂本明
トンデモ兵器まで軍事的に考察したナチスミリタリー入門

235

29

『増補 聖別された肉体 オカルト人種論とナチズム』 横山茂雄
ナチスのオカルト分析によってひとつの精神世界を描破した人文知の傑作

243

30

『ブラジルから来た少年』 アイラ・レヴィン (小倉多加志訳)

SF作品に見る冷戦時代のナチスイメージ

250

跋
258

主要参考文献
264

第

1

章

ナチスをめぐる
重要人物たち

1

『関心領域』

マーティン・エイミス（北田絵里子訳）

早川書房、2024年

日常から壁1枚の隣にある強制収容所

日本では作品の翻訳が少なかった現代イギリス文学の作家マーティン・エイミス（1949-2023）の『関心領域』は2014年に出版されていたが、日本で翻訳が刊行されたのは2024年5月のことだ。作品完成までに10年間を要したイギリスのジョナサン・グレイザー監督『関心領域』（2023年）の日本での公開のタイミングに合わせた出版企画なのである。

タイトルの「関心領域」（Interessengebiet）とは、ナチスが多用した婉曲^{えんきよく}用語のひとつ

で、強制収容所周辺地域をこのような表現で言い表したのであって、親衛隊管理区域を意味している。

本書がこのポストモダン文学を紹介するのは、フィクションでありながらも、特異な性質を有しているからである。実在の人物と架空の人物が多く登場する虚実が交錯する歴史小説の体を取りながらも、ナチス第3帝国の歴史的事実を物語内部に正當に封入し、ホロコーストがおこなわれた強制収容所を日常的な視点から描いているからだ。

「謝辞及び著者あとがき」にあるとおり、エイミスは無数の研究書や資料を精読したうえで、物語世界を構築しているために、非常に該博な歴史知識が盛りこまれた歴史小説でもある。

一人称告白体で、3人の語り手が入れ替わり語ること、たくさん歴史的人物が登場する群像劇としての物語は進行していく。ヒトラーの最側近マルティン・ボルマン（1900-45?）の甥という設定の連絡将校アングルス・ゴロー・トムゼン、アウシュヴィッツ強制収容所所長のパウル・ドル、ポーランド系ユダヤ人でゾンダーコマンドー（死体の処理などを担当するユダヤ人の特別労務班）のシムル・ザハリアシユである。

トムゼンとパウル夫妻ゲルダ・ボルとの道ならぬ情事、1933年のドイツ国会議事堂

放火事件と関連が深いとされる共産主義者データー・クリューガーの行方ゆくえの追跡が物語の縦軸で、強制収容所でのユダヤ人しゅうじん迫害の実態を横軸に、ユダヤ人絶滅政策とともに、ナチスドイツの滅亡までが語られる。

ナチス崩壊後には、強制収容所についてはなにも知らなかったと、ドイツ人たちが口をそろえて語った事実や、強制収容所所長の妻と情事にふけた自身が無関係であるかのごとく、「詩人と夢想家の住むのどかな国」が、世界でも稀に見る教養豊かな国が、なぜあんな狂気じみた、あんな途方もない蛮行に屈したのか？」と自嘲するトムゼンじちようが描かれるのだ。

なかでも、シウムルらユダヤ人の労働をめぐる記述には、慄然りっぜんとさせられるだろう。

「ゾンダー「コマンドー」たちは、とことん冷淡に黙々と、おぞましい仕事に取り組む。厚みのある革のベルトを使って残骸をシャワー室から死体保管庫ライヒ・エンケラーまで引きずっていく。ペンチとのみで金歯を引き抜き、裁ちばさみで女性の髪を切り取る。イヤリングや結婚指輪をもぎ取る。そのあと滑車装置に積みあげ（六、七体ずつ）、口をあけた焼

却炉まで持ちあげる。最後に灰をすりつぶし、その粉塵はトラックに積んで運ばれ、ヴィスワ川に撒かれる。このすべてを、すでに書いたように、ゾンダーは黙して淡々とおこなう。処理している相手が自分たちと同じ民族、同胞であろうと、なんら気にならないようなのだ」

「一九四二年一月二十一日、その数が非常に多かったため、親衛隊と秩序警察^{オルポ}は、死体を合同墓地に引きずっていく特別部隊を手伝わせるべく、さらに百人のユダヤ人を選び出しました。この補助部隊はティーンエイジャーの少年たちで構成されていました。彼らは食べ物も水も与えられず、雪と硬くなった泥のなかを、裸で鞭打たれながら十二時間働きました」(北田絵里子訳)

強制収容所所長の妻と不倫する情報将校よりも、むしろ主人公は、強制収容所内で大量殺戮された同胞の遺体を日常的に「処理」する労働に従事しなければ生きながらえない状況に置かれたシウムル・ザハリアシユたち、ゾンダーコマンドーのユダヤ人たちなのだ。

原作小説のこうした記述とは異なり、第76回カンヌ国際映画祭グランプリ、第96回アカ

デミー賞国際長編映画賞、音響賞など少なからぬ受賞歴を誇る映像作品『関心領域』には、たとえばステイブ・スピルバーグ監督・製作『シンドラのリスト』（1993年）に登場するクラクフ市郊外のプワシュフ強制収容所でなされたような、ホロコーストそのものが直接に描かれているシーンはない。

この映画で主題として映像化されているのは、アウシュヴィッツ強制収容所のじつさいの所長だったルドルフ・ヘス（1900-47、Rudolf Höß）と妻ヘートヴィヒ、その家族が生活する、庭つきの邸宅での牧歌的な暮らしである。このヘスが書いた手記は、ルドルフ・ヘス（片岡啓治訳）『アウシュヴィッツ収容所』（講談社学術文庫、1999年）で読むことが可能で、収容所内のユダヤ人の特別労務部隊についても記されている。

ところで、この一家の邸宅は隣接する強制収容所と高い壁1枚で隔離された土地にあるのが、このうえなく重要な映画の設定となっている。

ちなみに、ナチス副総統のルドルフ・ヘス（1894-1987、Rudolf Heß）とは、原語の綴りが異なる別人だが、よく混同されるのは、日本語のカタカナ表記ではドイツ語の発音の差異を表現できないという性質ゆえである。

原作小説にインスパイアされたグレイザー監督による新奇な物語として、いわば「発明」

されたこの映像作品の方法論は、暴力や残酷な場面を観客にみせなくても、強制収容所内での虐殺や冷酷を間接的に感受させることなのだ。

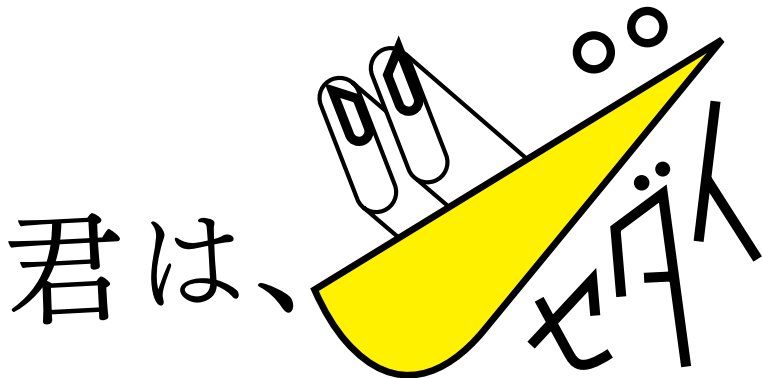
ポーランド国内の川や森といった豊かな自然に恵まれた静謐な地域に、かれらの邸宅はあり、家族は幸せに生活している。だが、1枚の高い壁を隔てた区域は、銃声、怒声、悲鳴、断末魔、犬の咆哮ほうこう、焼却炉の騒音が昼夜の別なく発生し、煙突からは黒煙が立ちのぼるという、恐怖と死が支配する世界である。

ヘスは家族との円満な家庭生活を送る一方で、エアフルトの有名な焼却炉メーカー「トップフ・ウント・ゼーネ」の技術者を自宅に招きいれて、より効率的な「リング式焼却炉」の説明を聞く。ヘートヴィヒのもとには、ユダヤ囚人から奪取されてきた大量の衣服が届けられて、彼女はそこから選んだ服を自慢する。ベッドのなかの子どもたちは誰のものとも知らぬ拾ってきた歯で遊んでいる……。

この家族は（この環境に耐えられずに立ち去るヘートヴィヒの母親と、終始おびえて泣きつづける赤子以外は）、高い塀のとなりの「領域」で犯されつづける蛮行のことをよく知りながら、積極的に〈無〉「関心」でいるのだ（しかも、この家族の平穏な生活は、強制収容所の存在によって維持されていることも忘れてはならない）。

そして逆に、これを観ている観客たちの「関心」は惹起じゃつきされつつけるのである。

夜の強制収容所の作業場で、囚人たちがみつてくれることを信じて、少女が食べものを埋めていくサーモグラフィ映像や、現代の国立アウシュヴィッツ^{II}ビルケナウ博物館の館員たちによる清掃シーンが劇中で突如、挿入そうにゅうされるのだが、その映像的效果は、この映画をじっさいに鑑賞することではわからない映像体験で、観客はそれらのシーンの意味を考えずにはいられない。音響デザインとともに、グレイザー監督の秀逸な演出といえよう。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!